

➦ レーシック手術では「眼鏡いらず」になれない

視力を矯正する方法として、最近ではレーザー手術（LASIK）手術が話題をよんでいます。これは、角膜を手術することで屈折異常を治す方法です。1990年にギリシャではじめてレーザー手術が行われて、以来アメリカを中心に広まりました。日本では2000年に厚生労働省が手術を認可してから、件数は年々増加しています。

その手順を簡単に説明すると、次のようになります。

- 1 角膜の表面を薄く切って、フラップと呼ばれる蓋のようなものを作り、角膜の表面をめくる
- 2 露出した角膜にレーザーを照射して、正しい屈折率になるよう表面の形状に変える
- 3 フラップを元の位置に戻す

レーザー手術は網膜に像を結ぶように角膜の形状を変えるのですから、視力は確実に向上します。しかし、一生眼鏡いらずになるとはかぎりません。手術によって遠視や近視などの屈折異常は治っても、水晶体の老化、すなわち老眼を避けることはできないからです。

レーザー手術を受けても、いつか必ず近くが見えづらい症状が出ます。「眼鏡・コンタクトレンズいらず」を求めてレーザー手術を受けても、いつかは老眼鏡をかけなければならないのです。

また、私はレーザー手術による実害も懸念しています。消費者庁と独立行政法人国民生活センターは、レーザー手術による被害に関する調査結果を発表しました。それによれば、過矯正による遠視、それに伴う頭痛や吐き気などの体調不良、乱視、ドライアイ、目の痛みなどの症状が施術後に発生しています。最も多い被害は、過矯正による遠視です。頭痛や吐き気などの症状も、それにとまなう症状でしょう。

くわえて、レーザー手術はここ20年ほどの手術です。私は、今後何十年かたった後、眼に濁りがでるなどの後遺症が出るのではないかと心配しています。角膜を削ることにより、角膜の組織を侵襲して大きな負荷をかけることで、眼に負の影響を与えるのではないかと考えています。

それでもレーシック手術を受けるのであれば、医師から事前にレクチャーを受けて、施術後のフォロー体制は整っているのかなどをしっかりと確認しておかなければなりません。レーシックのメリットだけでなくデメリットの説明も受けて、よく理解してから手術を受けていただきたいと思います。